

近世近代移行期における心身を基盤とした発達論的思想の比較

考察——山崎闇斎とメーヌ・ド・ビランの「魂と身体」の文脈より——

久保 隆 司

はじめに

本論の目的は、山崎闇斎（一六一九—一六八二）を世界哲学的文脈で理解するため、メーヌ・ド・ビラン（一七六六—一八二四）による人間探求の哲学との共時的な比較検討を加えることにある。闇斎は、江戸初期を代表する朱子学者・神道家とされ、「近世日本の心身論の祖」^①的性格を持つ。ビランは、近代フランスの政治家かつ心身論の先駆的哲学者であり、現代フランス哲学のベルクソン、メルロー・ポンティにも影響を与えた「フランス・スピリチュアリズムの祖」^②ともされる。両者の間での歴史的、地理的に直接的な関係性は考え難いが、思想・信仰面での個別性と普遍性に目配せをした比較研究が期待できる。

往々にして身体性から精神性、そして宗教性の領域をも含んだ統合性を持つ思想体系の構築者は、いわば、意識発達の合理的段階から超合理的段階への移行期ともいえる局面を迎える傾向があ

る。そのライフステージにおいて、葛藤し、実存的、心身的、宗教的変容を迎え、超克する体験のプロセスに直面する。日本では闇斎が、フランスではビランが、このような文脈における近世近代の代表的思想家と捉えることで、思想構造面で通じる点が見えてくる。また、超越的領域・宗教的体験（神道やキリスト教への転回）を主軸にした後期への賛否がある点も通じる。さらに、新しい国や国民のあり方、新しい生活様式に関わるアイデンティティの形成と維持に注目された時代に生きたことは、その思想形成にも多大な影響を与えたであろう。

なお、比較思想的行為に付き纏う問題であるが、例えば、「合理性」「魂・精神」「自我」「身体」「神」「恩寵」など日本語として同じ用語を使用しても、異なる文化間・時代間・個人間の文脈では、当然、言語的・文化的・宗教的な意味・ニュアンスの差異が存在し、同定は困難である。語彙レベルよりは、構造的な枠組みの比較から見えてくる思想や行動に注目することで、例えば、

類比（アナロジー）的に通底する共通項を通しての理解は可能であり、そこに共時性を重視する比較思想の一つの意義もあるとの立場を本論はとる。以上を踏まえた上で、本論ではビランの「三つの生」説を基軸に、闇斎の思想・信仰との比較を通して、主に心身論的・発達論的側面から相互の理解の深化を試みたい。

一 フランス哲学におけるビラン哲学とその構造的特徴

1 近代フランス哲学とビランに至る環境

およそ百年前、九鬼周造はフランスの近代哲学の主な特色は、「内的・心理的観察・分析などの尊重」「数学および自然科学・医学を避けて現実に即する」と総括した。現代フランス哲学にもこの特色は通底する。それは哲学という専門世界だけでなく、多くの人に開かれた平明な表現形式を通して、この現実世界を豊かに生きるための人間学／人間科学の探求といえよう。

ビラン登場以前の十七世紀のフランス哲学界では、人間には生得的に理性・精神が備わるとする大陸合理論の代表者で演繹的なデカルトと、数学者・物理学者であるが理性の限界を認め、直観・感情・神の恩寵・愛を重視した帰納的なパスカルに代表される二大潮流があった。ビランとベルクソンはパスカルの流れにあり、心と身体との関係性から、心と神との関係性へと導かれるとメルロ・ポンティは述べている。

十八世紀、近代思想の先進国はイギリスであり、一切の認知は知覚経験に基づくとしたロックがその代表である。「タブラ・ラサ」

で知られるその経験論は、フランスでも近代哲学の主流として受容される。十七世紀のデカルト、マルブランシユ、ライブニッツ、スピノザらの大陸の哲学は時代遅れと見做され、ロックの経験論の流れを強く受け、感覚論の哲学を主張したコンディヤックが、近代の人間精神の科学的研究の始祖と目された。この感覚論を基盤に、外部的（医学的・生理学的）な観察・分析を重視する観念学の系譜は、カバニスやトラシらに引き継がれ、「人間の科学による諸学の統一」を目指す。もともと「知の統一」は、ライブニッツからダランベール、ディドロに至る百科全書派の主題であり、観念学派に影響を与えたのである。

2 『習慣論』から「運動する身体の哲学」へ

十八世紀末、ビランは、観念学や生気論の影響下、「習慣」（＝外部から受け取られる同一の諸印象の反復）の二面性に注目した。外部刺激による印象は、習慣化で鈍化することあれば、逆に習慣化でさらに明晰化することもある。相反する結果が生じる鍵は「運動」の介在であり、人間は複数の重層的な「生」に生きており、それを経験している「生」の違いによって習慣の効果は異なるとビランは考えた。すなわち、自我の内在にあり、自我に影響を与えながらも独自に働く受動的・不随意的な「感覚的活動性」（感覚）と、自我の存在を基礎付ける能動的・随意的な「運動的活動性」（知覚）との区別に至る。後者は能動的運動が介在するが、習慣化によりその運動のための努力が軽減され、対象そのものへの注意が集中し明晰化するとした。能動的に身体を動かそうという意志の実現に際し、身体的な抵抗の感覚を受け取りながらも行為す

る努力を、内から主体的・内感的に体験することで自我形成が促進される。運動は思惟や感覚に先行する基盤であり、身体性は意識の起源と唱えたのである。

3 「三つの生」と階層性

一八二〇年前後、ビランは人間の発達における「三つの生」説を唱えた。¹⁶「第一の生」(動物的生、有機的生、感受的本能的な段階)は、人間固有でなく、自我の発生も成長もない。本能的な運動の段階であり、自然学と生理学によって探究がなされる。「第二の生」(人間的生、現象的段階)は、感覚し、思惟する身体を基盤に形成される自我の発達過程である。個人の努力で自我が育ち、自由意志で理性的行動が取れる能動的段階である。この領域の探究は現象領域の科学である心理学 *psychologie* の対象となる。¹⁷究極的には自我/意志を通して、魂と身体の統合の域に至ろうとする。「第三の生」(精神的生、実体的段階、形而上学的/宗教的/超越的段階)は、最晩年期のビランが最重要と考えた段階である。自我を基盤とする哲学が神秘主義に主役を譲る人間学 *anthropologie* の領域であり、自我否定の究極的な受動性により神の恩寵が得られるとした。¹⁸これら「三つの生」は、階層的構造を形成し、下の階層を含んで超えるという発達の関係性をとるので、¹⁹受動性(本能的)→能動性(認識的)→受動性(形而上学的)の三形態への変化となる。第一の生の受動性は、第三の生の受動性の基盤として共有されており、外からの観察分析では両者の区分が困難な場合も考えられる。

二 心身論的領域の探求——理性と身体性の統合

1 発達段階と共通点

ビランと山崎闇斎との間において、特に構造的な心身論とそれに伴う発達段階論の比較は、普遍性探求の文脈で意義があると考ええる。闇斎の生涯は、思想信条の転回から、禅学期(初期)→朱子学期(中期)→神儒兼学期(後期)と三分でき、ビラン自身の転回とも対応する三つの生の段階と類比的に捉えることができる。両者とも身体的基盤から「知性」を経て形而上学領域に至る段階的発達論を採っている。

両者はその思索の初期から、身体を内なる基盤として位置づけていた。デカルト的心身二元論に反するビランの目的は、哲学を内的知覚の基盤哲学としての再編成にあった。一方、闇斎は「自然二身三五倫ノ理有ル」と、「身」(または心身)を基盤としたが、元来の朱子学の観念的な「理」の理解とは異なり、感情とも結びついた実体的な「理」の顕れとして「身」を捉えた。²¹「心は内、身は外」との朱子説に反し、「心も身も内」とする闇斎の心身一致へのこだわりは、高弟間で「敬義内外論争」を招く。これは闇斎学の基盤概念「敬」²³のあり方に関わるものであった。²⁴

第二の生から第三の生に至る段階では、「合理主義」の有効性とその限界に関わる意識を両者は強く持ち、²⁵包摂的な超克の道を切り開こうとした態度は、近世近代の先駆者ゆえであらう。体験を意識発達の前提としながら、認識も重視する両者は、それぞれ朱子学的合理主義側面、大陸合理主義の能力向上も重視する。すな

わち、体験の体認を中心とする心身論ベースの超越的発達論を持ち、合理的領域を極めた上での超越的段階への発達を提示した。後の段階は前の段階を「含んで超える」という基本構造となる。

2 「第二の生」におけるストア哲学と朱子学の役割

第二の生の課題は、知性と身体性の統合である。ピランは、ストア主義が人間の理想的な生き方を体験的に示す、この領域に最適な実践哲学と見た。⁽²⁶⁾ピラニズムにおけるストア哲学の位置と、⁽²⁷⁾關斎学における朱子学の位置は類比的に捉えることができる。ストア哲学による瞑想実践等を通しての賢者の道の過程が、朱子学での「居敬靜坐」の行動から始まる聖人の道の過程に対応する。

思想的には、ヘレニズム世界で、ストア哲学は知的エリート階層に支持された。禁欲主義的努力の元、瞑想を主とした心身の訓練実践を通じて、理性 *logos* で情念 *pathos* を超克する不受動心 *apatheia* という境地に達することを最高の善とした。一方、朱子学は、宋代の士大夫を対象とした道である。江戸期日本では武士が主な担い手である。中でも關斎の門流の崎門は質素儉約を重視し、禁欲的であった。その思想→行動原理は、心身一致の状態・態度「敬」の語で象徴される。⁽²⁸⁾

3 マクロコスモスとミクロコスモス——基底に共通する世界観

湯浅泰雄によると、ストア派は自然に従って生きる態度を重視する。⁽²⁹⁾この自然 *physis* は、人間の本性と大宇宙である物理的自然のあり方という二つの意味を持つ。道徳法則と自然法則の一致が基盤であり、内面的な心身的訓練を通じて、自己の心・魂の状態を変容し、変性意識体験の中で大宇宙との交流を意図する。⁽³⁰⁾

朱子学における「氣」の運動を媒介とする天地人の対応関係（天人合一）を見てとる中国の考え方を継承しながらも、關斎は、「天人唯二」として日本の特殊事情を鑑みて中心概念に据えた。中国では、天人相関はあれども、絶対的な断絶がある。一方、日本では天（神）と人とは、アニミズム的な精神文化も底流にあるのが、より直接的には先祖と子孫という血縁の関係で歴史的に繋がっている面に注目し、天人相関を身近に捉えた。⁽³¹⁾

身体に即して大宇宙と小宇宙の対応関係を感じ得る神話時代の思考様式（レヴィー・ストロース的には「野生の思考」）を内包するストア派の身体論は、根源的なロゴスに発する氣息 *pneuma* を軸に、古代医学での心身相関的治療法との繋がりが、両宇宙の対応関係を具体的に示す。⁽³²⁾大小宇宙の対応関係は、心身一致的な東洋的思考と心身分離的な西洋的思考に分岐以前の古代に共通した基盤であったと知れる。湯浅は、身体論（心身論）にとつて、身体的な呼吸⇌神の息吹⇌聖靈の觀念が重要なのは、それが靈魂と肉体、つまり心と身体を結びつける媒介となる意識下の潜在的作
用とされているからだとする。個人の受動性レベルでの聖靈の働き「恩寵」を根源的とするピランにも共通しよう。

三 超越論的領域の探求

——高次の受動性と恩寵／慈悲による統合

1 「第二の生」から「第三の生」への移行と「恩寵」

第二の生の境地は、「魂と身体性の統合」⁽³³⁾である。ここに至るには、強い意志による高度な自我形成が要求される。現実的には、

ストア派でも朱子学派でもここが到達点であろう。結局、能動的生の究極段階のストア派は、理性で全てが対処できるとの立場であり、第二の生の諸限界を超えはしないとピランは述べる。³⁶ 第二の生までの極は「自我」のみであったが、第三の生では新しく上位の極「神」が現れるのである。³⁷

第三の生で、ピランは理性に基づいた哲学に、宗教的概念や体験の取り込み可能性の問題に直面した。³⁸ この種の超理性的領域の取り込みを避ける哲学者は多いが、ピランは、心理学から人間学の新しい包括的枠組みで、統合的体系の構築を目指した。

闇斎も同種の課題にぶつかり、葛藤し、超克したと考えられる。闇斎は神道と朱子学との兼学を選んだ。安易な牽強附会を避け、双方の学びの強制はしなかった。ただ初学者には朱子学を優先した。第二の生では、自我による理性の発達³⁹は、恩寵を受けるための必要不可欠な準備であるが、それが朱子学であった。

第三の生は、宗教的な形而上学的、神学的領域である。宗教的感情・魂・信仰が扱われる。第一と第二の生の間と全く異質の区別が、第二と第三の生の間にはあり、類比的に自我と魂はその本性の違いから明確に区別される。⁴⁰ 能動的な認知機能は関与しない受動性の段階であり、神からの恩寵のみが機能する。自我は消失するが魂の実体は残る。質的に異なる領域間の移行では、幾多の葛藤体験を伴う。従来のアイデンティティの放棄が要求され、社会的な死と再生のプロセスとなる。従来のピラニズム理解者に、この宗教的領域を受け入れることは困難であった。一方、闇斎の弟子たちも戸惑い、朱子学的合理性にとどまる専門学派と超越

的・信仰的な垂加神道派と大きく二分した。

2 「努力・自力」と「恩寵・他力」間のダイナミズム

人間の上昇する意志力の過大評価や、逆に全てを神の恩寵とする意志力の過少評価は、共に極端だとピランは考えた。⁴² 東洋的な表現では、例えば、前者は自力、後者は他力となろう。経験の基盤上に各人の明確な意志で、精神・魂の成長が可能と考えたピランは、ストア哲学の理性・意志力の限界を理解し、自力的なストア哲学と他力的なキリスト教の調停を望んでいた。⁴⁴

一方、中世神道では、『日本書紀』に記述される「靈魂奇魂」は心臓に位置する「心神」として、万人に備わる天御中至尊の分霊とされた。心神の内在性ゆえ、各人の意志で「神人合一」を目指すことも可能となる。闇斎は自身の心神を祀ったが、事実上の日本初の「生祠」事例とされる。闇斎の神道においては、恩寵は万物に対する久遠の慈悲「天御蔭日御蔭」に通じると考えられ、その究極的な受動態での享受は「冥加正直」の態度に、魂の実体は心神に相当しよう。

以上から、意識的な努力の前か後かという時間秩序上に、自然による受動的・動物的な生↓意志的・人間的な生↓恩寵による受動的・精神的な生の通時的発達を見ることは重要な基準と考える。同時に、恩寵は全ての瞬間、全ての「生」の基底に働いていること、人間は常に下位の「生」を含んでいること、そして第三の生に達してもそれはカイロスの非時間体験の場であり、日常生活はクロノスの時間に基づく第二の生が主との認識が重要である。自我成立の第二の生の上に、第三の生での非時間的な恩寵体験を、言葉

を媒介に内省し、文字を媒介に哲学することが可能となる。

3 魂と身体の「分離」か「統合」か

第三の生では、これまでの魂と身体との結合の探求からキリスト教への転回により、後期ビランでは、魂を身体との分離において探求する方向に変わったとの解釈がある。⁽⁷⁾この転回は、「両「生」間の断絶を意味し、順序ある「生」の発展でないというのである。しかし、魂と身体との分離は、第三の生の条件なのだろうか。さらに第三の生とは、魂が肉体と分離した時⁽⁸⁾「死」によって始まるとの解釈にもなるが、それは適切だろうか。⁽⁹⁾

第三の生で自我は放棄されるが、魂は維持され、宗教的感情的部分は豊かになる。精神・魂の一部である自我の消滅は、その担当する合理的な認知機能の領域に大きな影響を与えようが、魂と肉体の分離問題とは直接的な関係がない。まして第三の生の段階では、身体は不要的な解釈は適切でなからう。そもそも肉体的な死は第一の生の消失も意味し、その基盤上の第二の生も第三の生も消失する。さらに、身体を魂の牢獄と捉える「ソーマ・セーマ」的なプラトン派、グノーシス派は別として、キリスト教神学的に、七世紀の証聖者マクシモスからも、恩寵に魂と身体との分離は不要なことが知れる。⁽¹⁰⁾この文脈では、身体に「生きていること」と「動くこと」とを与える根源の働き *energeia* に注目せず、魂を身体から分離させたり、一方を他方に解消させることは、生身の自己を欺くことである。⁽¹¹⁾また、イエズス会の門脇佳吉神父は、⁽¹²⁾聖書での身体 *soma* とは旧約・新約一貫して人間全体を表すという。恩寵には、むしろ魂と身体が前提なのである。

開斎も同種の発達段階の断絶に直面した。朱子学的合理主義に基づく真理追求の方法では、『日本書紀』神代巻に書かれた宗教的真意が理解不能であった。その超克祈願で藤森神社に参詣した一連のプロセスの事例は、ビランの移行の理解の参考にならう。開斎は、「神儒兼学」の道を切り開き、朱子学と神道間のギャップを超克し両立させた。⁽¹³⁾さらに、日本で初めて自身の心神の生祠もしている。これは一種の分祠であり、心身一致の状態だからこそ可能と解釈でき、魂の身体からの分離と捉えるべきではなからう。ビランでも、哲学から宗教領域に至るに際し、必要なのは心身の分離ではなく、より大きな秩序に基づく統合である。それは自然で順調な魂の発展であり、十全に恩寵を受けるものである。そもそもビラン自身が、第三の生において、神の働きかけの感受は、身体的有機組織と結合せる精神によってのみ可能と主張している。また、宗教的領域での実践面では、開斎の到達点は、「敬」(つつしみ)の基盤と「神垂祈禱」の能動的行為(意志)、そして「冥加正直」という受動的な正直の状態と慈悲である冥加を受けることにある。⁽¹⁴⁾一方、ビランでは、自身は至らぬ弱い存在との自覚を持ち、神の道の準備である「祈り」を実践し、⁽¹⁵⁾神的な愛の力で、生命の源泉との一体を目標とする。以上からも、両者は根本的なところを共有し、構造的・方法的にも重なるところが多いと考える。

おわりに——心身論から形而上学へ

ビランは、自然学・生理学・心理学を踏まえた哲学でありなが

ら、形而上学的・超越的な宗教的意識をも含む統合的な人間科学・宗教心理学の確立を目指したが未完となった。享年五十七歳。山崎闇斎は、朱子学と超越的な神道との兼学を唱えたが病に倒れた。享年六十三歳。ビランと闇斎は、基盤となる身体性と心・魂との統合の理論と実践を通じて、永遠の真理／永遠の哲学への探究心を生涯にわたって維持した。それゆえ、片やスピリチュアリズムの祖として、片や崎門・垂加神道の祖として、その思想・哲学は、時空を超えて今に生きる私たちにも訴えかけ、惹きつけるものを内包するのであろう。

- (1) 久保隆司「闇斎神学における心身論の課題と比較思想的展開について——近世と近代の「グローバル意識」から心身観の系譜を探る——」『比較思想研究』第四五号、二〇一九年、三〇—三八頁。
- (2) 岩田文昭は、「方法的二元論にもとづき、行為を強調し、心理学的事実から絶対的なものへと進展し、宗教への積極的関わりをもつ思想潮流」というグレイエの説を一般的定義とする（フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学」創文社、二〇〇一年、一九頁）。
- (3) 久保隆司「宗教思想家の内面的「葛藤」と「超克」プロセスの構造と解釈について」『人間性心理学研究』三六（一）、二〇一九年、二四三—二五四頁。
- (4) 九鬼周造「現代フランス哲学講義」『九鬼周造全集 第八巻』岩波書店、一九八一年、四九頁。
- (5) 三宅岳史「総序」『現代フランス哲学入門』ミネルヴァ書房、二〇二〇年、一頁。
- (6) 伊藤勝彦「人類の知的遺産34 パスカル」講談社、一九八一年。澤瀉久敬「仏蘭西哲学研究」創元社、一九四七年、参照。
- (7) Merleau-Ponty, M., *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche Br-
ran et Bergson*, Paris, Librairie Philosophique J. Vrin, 1978, p.9.

- (8) Gouhier, H., *Maine de Briran par lui-même*, Paris, Seuil, 1970, p.109.
- (9) 諸学問は、「共通の源泉」たる「感覚性」において相互に結びつき、肉体的存在としての人間の「幸福」を実現するとの基本姿勢をとり、医学・生理学に基づいた人間学を構想した（村松正隆『現われ』とその秩序・メヌ・ド・ビラン研究」東信堂、二〇〇七年、一三—二二頁）。
- (10) 同書、一三頁。
- (11) モンペリエ学派のバルテズやビシャラ（鑄物美佳「運動する身体の哲学」萌書房、二〇一八年、三—四二頁）。
- (12) メヌ・ド・ビラン『人間学新論』（一九八九年）増永洋三訳、晃洋書房、二〇〇一年、五頁。
- (13) コンディヤック以来の感覚一元的な還元的視点の否定を意味する（村松、前掲書、四六頁）。
- (14) 村松、前掲書、一四四頁、参照。
- (15) メヌ・ド・ビラン『人間の身体と精神の関係』（二〇二二年）掛下栄一郎監訳、早稲田大学出版部、二〇〇一年、四六頁。
- (16) Gouhier, *op.cit.*, pp.141-142.
- (17) ビランは心理学を他の学問の基礎に置いた（Moore, E.C.T., *The psychology of Maine de Biran*, Oxford University Press, 1979, p.2）。
- (18) Gouhier, *op.cit.*, p.142.
- (19) 佐藤国郎「メヌ・ド・ビラン研究——自我の哲学と形而上学——」悠書館、二〇〇七年、三八八頁。
- (20) 山崎闇斎「敬斎箴講義」『日本思想大系 山崎闇斎学派』岩波書店、一九八〇年、九四頁。
- (21) 高島元洋『山崎闇斎——日本朱子学と垂加神道』ペリカン社、一九九二年、一七二頁。
- (22) 「君子敬以直内。義以方外」（『易経』文言伝、坤為地二爻より）。
- (23) 特に闇斎の高弟・浅見綱斎のいう「本然自然ノ身トトモノ敬」（綱斎先生敬斎箴講義）『山崎闇斎派』岩波書店、一九八〇年、一七八頁。
- (24) 久保隆司「敬義内外」説と「神儒兼学」との関係性における闇斎神学の構造的理解について」『藝林』六八巻二号、藝林會、二〇一九年、一

六六—二〇五頁。

- (25) 久保 前掲『人間性心理学研究』参照。
- (26) Gauthier, *op.cit.*, p.28.
- (27) ストア派は精神修養法の実践と結びついており、古代の諸哲学の中で最も具体的な形で身体論を展開した(湯浅泰雄『身体の宇宙性』岩波書店、一九九四年、一三〇頁)。
- (28) 山崎闇斎、前掲『敬斎箴講義』八〇—九四頁。
- (29) 湯浅、前掲書、二二二頁。
- (30) 同書、二二二—二二三頁。
- (31) 「二神降居彼島而下此言、人之男女和合之道也。或以「未生言」已生、或以「已生言」未生。皆所以明「天人唯一之理也」(山崎闇斎『垂加社語』『神道大系 垂加神道(上)』神道大系編纂会、一九八四年、四一一頁)。
- (32) 湯浅、前掲書、二三五頁。
- (33) 同書、二五七頁。
- (34) 同書、二五六—二五七頁。
- (35) *L'union de l'âme et du corps* (Gauthier, *op.cit.*, p.40).
- (36) 中敬夫「メーヌ・ド・ゾルン」——受動性の経験の現象学』世界思想社、二〇〇一年、二二六頁。
- (37) ビランの発言「道徳律にもっとも正確に適合する人間でさえ、まだ光の子や神の息子ではない。精神的生はもっと高く、それは人間に由来しない。」(同書、二二六頁)。
- (38) Gauthier, *op.cit.*, p.158.
- (39) 佐藤、前掲書、三五六頁。
- (40) 澤瀉久敬は、「生」の第二と第三の段階の間に、「中二階」(葛藤的な過渡期)の設定を提案している(『メーヌ・ド・ゾルン』弘文堂書房、一九三六年、一八二頁)。
- (41) 佐藤、前掲書、三五五頁。
- (42) 同書、三〇八頁。
- (43) 中、前掲書、三三八頁。
- (44) 佐藤、前掲書、三〇九頁。
- (45) 存命の人の魂を神として祀ること(加藤玄智『本邦生祠の研究——生祠の史実と其心理分析——』国書刊行会、一九八五年。「生き勧請」とも(「大己貴ノイキヨニ自御神体ヲ御勧請ナサレタゾ」)(山崎闇斎「神代記垂加翁講義」前掲『神道大系 垂加神道(上)』三六〇頁)。生祠後も人は生きており、魂と身体は一体で、分離されるわけではない。魂・心神は物質ではなく、一種の分霊・分祀と考えられる。
- (46) 中、前掲書、三三四—三三五頁。
- (47) 佐藤、前掲書、三三二頁。
- (48) 同書、三六九頁。
- (49) マクシモスは、基本的に人間の心・魂が身体から離れて「それ自体として在る」という把握を退け、人間の魂は、自然・本性的に身体と結びついているとした(谷隆一郎『人間と宇宙的神化』知泉書館、二〇〇九年、一一三頁)。
- (50) 同書、二一〇頁。
- (51) 門脇佳吉『身の形而上学』岩波書店、一九九四年、三九頁。
- (52) 久保隆司「井筒俊彦の『神祕哲学』概念導入による山崎闇斎の神学思想の再評価について」『宗教研究』九三(二)、二〇一九年、一一二—四頁。
- (53) 増永洋三『フランス・スピリチュアリズムの哲学』創文社、一九八四年、五五頁。
- (54) 天照大神の託宣「神垂以三祈禱為先、冥加以三正直為本」(倭姫命世記『神道大系 論説篇五 伊勢神道(上)』神道大系編纂会、一九九三年、九六頁)を、闇斎は最重要視し、その神道の流派名「垂加」にもなった。
- (55) 澤瀉、前掲書、一七三—一七四頁。
- (56) Gauthier, *op.cit.*, p.164.
- (くば・たかし、心身論・身体心理学、早稲田大学講師)